

## COVID-19から得たこと

国立国際医療研究センター病院  
看護部長  
佐藤 朋子

日本で初めてのCOVID-19患者が発生してから、10カ月が経とうとしています。その間私たち医療従事者は未曾有の状況の中で、日々起こる様々な状況にその都度「最も適した対応」を考えながら医療を提供し続けてきました。当院では武漢からのチャーター便や、ダイヤモンドプリンセス号の患者の受け入れを開始したのと同時期に、国内でも急に重篤な患者増え、第1波が押し寄せてきました。日々の対応に追われていましたが、その後、感染者の増減はあるものの、院内は徐々に落ち着きを取り戻してきています。

振り返るとCOVID-19患者を受け入れたり社会にCOVID-19が蔓延したことで、困難の大きさを感じたりすることもあります。しかし、COVID-19患者を受け入れたからこそ病院組織としての成長もあったのではないかと感じています。例えば、日々変化する状況に対応するべく、院長を部会長とする対策本部を立ち上げ日々の医療レベルを決定し、方針を病院全体で共有するよう努力しました。それによって、職員が一丸となり未曾有の状況に立ち向かうことができました。また、第1波での経験が現在のCOVID-19対応にいかされていることで、病院が平穏を取り戻しつつある大きな要因のひとつとなっています。そして、困難さも少しずつ解決されてきています。会議はオンラインが主流となったり、就職説明会や採用試験もオンラインで実施したりするなど、その目的を果たすべく新しい形での対応が進んできています。

また、COVID-19は日常生活にも大きな影響を与

えました。これまでの日常生活の変容が必要となり、それに伴い新たな言葉も生まれました。「三密」（密閉・密集・密接）、「ソーシャルディスタンス」「在宅勤務」「オンライン飲み会」などです。これらは感染防止の観点から、人と人の距離をとることを促す言葉であり、感染拡大を防ぐためには必要なことかもしれませんが、人と人の関係が希薄になるのではと淋しいさもあります。更に、「Go To イベント」による感染防止対策と社会経済活動の両立を目指す対策も始まりました。私たち国民に新たな日常を慎重に着実に定着させる責任が課せられています。COVID-19とどう共存するか、一人ひとりが真剣に向き合う必要があると思います。

一方、このような状況の中でも、これまでと同様であると感じたこともありました。ひとつは国立系病院間の連携です。当院がCOVID-19患者への医療提供に集中することができたのは、結核患者を、NHO病院に受け入れていただくという協力体制があったからです。快くお引き受けいただきましたことに心より感謝しております。今後もこのネットワークが継続することを切に願います。そして、もうひとつはCOVID-19の流行がいつか収束することはあっても、新興・再興感染症と人類社会との闘いは続き、今後、我々は新たな新興・再興感染症の脅威に耐える医療体制と社会のシステムを創り上げていかななくてはならないことです。これは、医療従事者として覚悟しなければならないと痛感したことでした。